

## 「ブッダガヤ・ベナレス紀行」

山本武明

ベナレスにやってきた。ガンジス川の水から沐浴を眺めた。この地で死を迎え、その遺灰が聖なる水に流されることを願って集まった人達の沐浴を。

ベナレスについては以前からいろいろな話を聞いていた。ヒンズー教徒は、死ぬためにこの地を目指し、不幸にもその途次で死を迎えた場合、所持している財産の多寡によって死体を焼く薪の本数が決められるから背中だけ焼かれた半焼きの死体が川に流されているとか、子供など未成年者は焼かれることなくガンジス川に流すことで母の胎内に帰っていくのだとか。そして、それら死体の中には川の中に打たれた杭に引っかかるものもあり、その目や腸をカラスがつついている情景を目にしたといった話である。

私は、インドにはビジネス、結婚式への参加、観光目的で数十回来ている。訪れた都市も、北インドではデリー、アグラ、ラクノウ、ナイニताल、ハリドワール、リシュケシュ、テリー（現在は湖底に沈んでいる）、アルモラ、カンサニ、西インドはアーメダバード、ムンバイ、プネ、ゴア、南インドはバンガロール、マイソール、ウッティ、チェンナイ、コーチン、カニヤークマリ、東インドはコルカタ、ブバネッシュワールなどがある。しかしながら、どういう巡り合わせなのか、これだけ多くの都市を訪れながら、日本人に最も良く知られている仏教の聖地ブッダガヤとかヒンズー教徒が希求して止まない終焉の地ベナレスには、これまで訪れる機会がなかった。

12月23日午後2時30分、クアラルンプールLCC空港からコルカタに向け飛び立ったジェットは、約3時間でコルカタのチャンドラ・ボース国際空港に着いた。時差は2時間半、現地時間午後3時50分である。入国手続きを終えて、今度は、すぐ隣にある国内線の空港からパトナへ飛ぶ。離着陸の際に機上から見たコルカタの街は白灰色の水球の底に潜む恐竜のように思えた。

パトナは、ブッダガヤに一番近い空港のある町で、ここからブッダガヤに行き、ベナレスを回りまたパトナに帰ってくるという行程である。現地時間午後5時過ぎにパトナ空港の前でレンタカーを借りブッダガヤへ向かった。ドライバー付きのランドクルーザーで、6時間で1500ルピー、日本円にして約3000円である。バスも出ていて60ルピーでブッダガヤまで行けるが、途中で故障することが多く、故障すれば替りのバスを待たなければならない。翌朝の10時ごろまでそのバスはこないという。今回の旅には、安中又六さんという86歳の知人が同行している。安中さんは、とても86とは思えない元気な方であるが、道路脇で一夜を過ごすのは無謀な話である。バスじゃあ行けない。

100km足らずの道のりだが途中に点在する村や町の中を通る時は、混雑のため時速10kmぐらいで進まなくてならない。道路のコンディションも悪い。マッサージロードだ。ブッダガヤに着いたのは夜の9時近くであった。

これが、ブッダガヤか！お釈迦様が悟りを開いたという菩提樹が残るマハーボディ寺院は、眩いばかりのイルミネーションに包まれている。寺院の周りには燃えるような朱色の

法衣を纏った坊さんの群れがイルミネーションの光の中を行き交っている。まるで巨大なレッドドラゴンがうねっているような錯覚に陥る。露天が並び、物乞いが走りよってくる。

午後9時過ぎ、私達の車はマハーボディ寺院の脇のホテルに到着した。仏教の聖地巡りの始まりだ。フロントでチェックインの手続きをして部屋に案内される。3階の15号室である。荷物を置いて部屋をチェック。期待はしていないがバスルームを覗く。便器、シャワーホース、小型のタンク。なんとなく納得してから着替えをする。気温12℃と日本の初冬並みなのでウィンドブレーカーをはおりロビーに下りる。ホテルを出て、マハーボディ寺院の正門の方に曲がると、その界限には露天、屋台、諸々の商売屋、あるいは路地裏に行くと食べ物屋があって一段と賑やかだ。お釈迦様が覚りを啓かれたところに入るのだ。数珠の一つも持っておこうと考え、露天で購う。1つ120ルピーの数珠を30ルピーに値切り2つ手に入れた。寺院の門をくぐりながら「日本円で60円か、罰当たりなことをしたかな」と、ちょっと思う。寺院の中は、光で満ち溢れていた。まるでクリスマスイブの夜の銀座か渋谷。「あっ！また、罰当たりなことを」。私は、日本にいる家族のことや、社員の無事なことを願って、また、世界の人々が互いに相手の気持ちを慮り、相手の立場になって考えれば、この世の争いに捲き込まれ命を落とす人たちも少なくなる。私もそのように努力し、周りにもそう啓蒙していくつもりであるからお導きください。と、祈りをささげる。菩提樹の下へ進みながら、今のでちょっとは罰当たりも許されるかな？...  
…呆れ果てた奴だ。

菩提樹の下には、僧侶が二人座っていた。その前の庭の中では、欧米人らしき青年が熱心に五体投地を繰り返している。デジカメを向ける。フラッシュの光。悪いかなど思ったが、僧侶も青年も何事もなかったように没頭している。マハーボディ寺院は、高さ52メートルの塔で、寺院内に金色の仏像が祀られている。仏像から発する光は、寺院の境内を取り巻いて装飾されたイルミネーションの光を圧倒していた。境内には多数の僧侶や信者達が五体投地を行っていて、深い礼拝を捧げる僧や信者のその姿には時を越えた信仰の力を感じる。もう一度手を拝し、般若心経をひとしきり唱えマハーボディ寺院参りの締め括りとした。ホテルに戻り、遅い晩御飯を食べて就寝。明日は3時起きである。

電話が鳴っている。モーニングコールと、直ぐには気づかない。着替えてロビーに下りると、「遅いよ、山ちゃん」と、安中さんが声をかけてきた。ロビーのソファでおいしそうにコーヒーを飲んでいる。

「私もコーヒー飲みたいな」

「もう、時間無いよ。道が混むと間に合わないよ」

「大丈夫ですよ。ここから20kmでしょう。十分間に合いますよ」

「いや、いや、何が起きるか分からないじゃない。これを逃したら、何のために来たのか、死んでも死にきれないよ」

そんな大袈裟な、と言いかけて言葉を飲み込んだ。安中さんは、法華経日蓮宗の国柱会の理事長であった時、一度この地に来ていた。その時は、4大仏跡の巡礼ツアーであり、

引率者の一人でもあったためやりたかったことが出来なかったらしい。今回の旅の目的の一つが、安中さんの遣り残した願望を叶えることであった。

「じゃあ、出発しましょうか」

「行きましょう」

ホテルの前に白いワゴン車が停まっている。昨夜、手配をしておいた運転手付のタクシーだ。漆黒の闇、星明り一つ無い。午前3時40分、車に乗り込む。目的地に着く、午前5時20分。ここは、グリッドラクター山（霊鷲山）のふもと。この山の頂きにお釈迦様が、初めて法華経を説いたとされる聖地がある。私たちは、その聖地で日の出を拝し、経を唱えるのだ。よし、登るぞ！でも道が分からない、というより、真っ暗で見えない。案内人もいない。明るくなるまで待っていたら日の出に間に合わない。誰かいないかとあたりを見回していると、焚き火が見えた。近寄っていくと、3、4人の工夫らしき男たちがいる。道路わきの庭を修理している。話しかけてみたが全く通じない。焚き火にあたってよいかとジェスチャーすると、ニコニコ笑う。よいのだらうと解釈して焚き火の周りに置かれた切り株に座ると、一人、二人と手を休めてそばにやって来た。しばらく通じない言葉で話し合っていると私達が山に登ろうとしていることが分かったのだらう。彼らは、「マッキーカム！マッキーカム！」と言いながら身振り手振りで木の上を指し、何か落ちてくるようなジェスチャーを見せ始めた。どうやら猿がいて、襲ってくると言っているらしい。

「安中さん、どうします？」

「う～ん、・・・」

その時、遠くのほうから何かを叩く音が聞こえ、次第にこちらへ近づいてきた。まもなく、一人の坊さんが手に持った団扇のような太鼓を叩きながら山道を登って行った。

「安中さん、ついて行きましょう」

工夫たちにのど飴を手渡しお礼の気持ちを伝える。焚き火はありがたかった。

太鼓の音をたよりに真っ暗な山道を登り始めた。思いのほか整備された石畳の道である。20分ほどで周囲が明るくなってきた。安中さんの安心した気持ちが伝わってくる。

「道がずいぶんきれいになっているなあ。前に来たときは石ころだらけの道だったのに」

「歩きやすいよ、いやあ、よかった」

右上前方に岩山が見えている。夜明け前の薄明かりの中で浮かんでいるような感じだ。

「あれだよ、山ちゃん。あの岩山に小さく開けた頂上に説法台があるんだ」

「よかった、間に合って」

グリッドラクター山の頂、お釈迦様が弟子たちに初めて法華経を説いた聖地。

2009年12月24日、午前6時24分、私たちは立っている。今、この地に。

安中さんの緊張が伝わってくる。陽が昇り始めた。山の端にかかるように広がる薄雲の端が青緑色に染まる。薄墨を引いたような赤黒い太陽、閃光のような白黄色の光が天に広がっていく。安中さんが手を拝わしている。朝日に映えるその顔が巖かで、誇らしげだ。

朝日を背景に記念写真を撮る。静かな心持ちである。

安中さんが説法台に正座し経を唱え始めた。安中さんが座っている台は、約6m四方のレンガ敷きでその周りを高さ40cm、幅30cmぐらいのレンガ造りの壁が囲んでいる。壁は、太陽が昇ってくる方角が開いていてこの台への入り口になっている。入って直ぐのところ丸い台座のような石積みの線香台がある。安中さんは、線香台を背にして経を唱えている。その前にはお釈迦様の姿を映した記念碑とおぼしき銅版が置かれ、お供え物やいろいろな国の国旗が架けられている。ここでも西を向いて拝むのか？いや、ここが最終の地なのだ！安中さんの前には、今も東に向けて説法するお釈迦様が常在しているのだ。

読経が終わり、記念写真をひとしきり撮って下りかけようとしたとき、

「日本の方ですか？」と声をかけられた。

石段の下に僧侶が立っていた。右手に団扇のような太鼓を持ち、白い僧服の上に黄色い袈裟を左肩からかけている。20歳前半にしか見えない若い僧だ。

「安中さん、日本のお坊さんですよ」

「うん、そうみたいだね」

「皆さんはどちらからですか？」

「コルカタ、いや、東京からです。お坊さんはどちらからですか？」

「私は、ふもとの町にある竹林寺から毎朝ここに登ってきます。ここから30分ほど登った西隣の山に私たちが修行をするお寺があります。日本山妙法寺というお寺です。そこで、お昼まで修行をしております。よろしければお立ち寄りください。お茶などお出しいたします」。そう言い残して、若い僧は歩き去っていった。しばらくの間、下の方へ向かって聞こえていた太鼓の音がやがて左上のほうへ移っていった。

「山ちゃん、ありがとう。夢がかなったよ」

安中さんは、日蓮宗国柱会の新年会で、お釈迦様が法華経を説いた聖地で朝日を拝み、経を捧げてきた、ということ報告するのだと言う。

「下りましょうか」

「うん、下りよう」

「晴れ晴れとした声ですね」

「そりゃあそうだよ」といって安中さんは顔を上げて周りを見渡した。

登ってくるときは気が付かなかったが、少し下ったところに左上へと続いている脇道が目に入って来た。大人の拳ほどもある石ころだらけの道である。

「山ちゃん、僕は遠慮するよ」と安中さんが言う。

足が勝手に左に入ってゆく。あれ、という思いが一瞬脳裏をよぎる。この石ころだらけの山道はあの若い僧侶のいるお寺に通じているのだ。話を聞いてみたかった。

「安中さん、下で待っていてください。1時間ぐらいで下りていきます」

三、四十分登って、山門らしきものが見えてきた。そこをくぐって境内に足を踏み入れる。人けは無い。白い仏舎利塔が立っている。大きい！。上野公園や眉山など日本各地にある

ものよりはるかに大きい。仏舎利塔の正面には金色に輝くお釈迦様の像が東を向いて鎮座している。視線の先にあの聖地グリッドラクータ山（霊鷲山）の説法台が見えていた。

「よくいらっしやいましたね」と、声がかかり、先程の若い僧侶が微笑みながら近寄ってきた。

「どちらから登ってこられました」。

「右の山道からです」

「それは、大変でしたでしょう。こちらの道が登りやすかったでしょうに」と、左手にある道を指し示す。コンクリートできれいに舗装された階段状の道が見えている。

「こちらへどうぞ」

案内されるままに『日本山妙法寺』と書かれた看板が掛かっている建物の中に入る。縁の下にもぐりこんだような印象を覚えた。

突き当たりまで行き、引き戸を開く。日本で見慣れた本堂がそこにあった。ピリッとするような気に覆われている。自然に背筋が伸び、心が引き締まってくる。入口に近いところに正座する。右手の戸が開き、初老の僧が入ってきた。落ち着いた静かな気を漂わせている。本尊を前にして拝伏する初老の僧。その左で同じように拝伏している若い僧。

「南無法蓮華経」「南無法蓮華経、南無法蓮華経、・・・・・・・・・・・・・・・・」

朝のお勤めなのだろうか？俺は、真言宗なんだが……。仏前勤行、-----願解如来真实義。

日蓮上人の木像ともう一体痩せこけてはいるが迫力を感じさせる木像を前に二人の僧の経が続いている。「南無法蓮華経、南無法蓮華経、・・・・・・・・・・・・・・・・」

読経が終わり、若い僧に案内されて、本堂を出る。

「どうぞ、こちらへ。お茶を用意いたしますので」

先導されるままに質素なテーブルに着く。あらためて周囲に目を向ける。右手が本堂。左が入ってきた入口。正面は自然の岩が壁になっているらしい。富士山の樹海にある溶岩のような岩で黒々としている。岩の窪みに仏像が安置されていた。天井はコンクリート造である。どうやら、上に建物があるのだろう。入ってきた時に、縁の下と感じたのはこのせいだったのだろう。背後は吹き抜けになっていて私が登ってきた山道が見えている。

小ぶりのやかんに入ったお茶が運ばれてきた。テーブルに置かれた紙コップで飲む。ほとんど白湯に近い茶である。朝食も勧められるが遠慮する。テーブルを挟んで二人の僧侶が、朝餉をとり始めた。古ぼけたアルミの弁当箱のような器の中に煎った米粒や揚げ煎餅が入っていて、白湯でふやかすようにして食べている。こびりつくように器に残った米粒に白湯を注ぎ、手で洗っている。それをきれいに飲み込んで朝食が終わるようだ。

「こちらにはもう何年ぐらいいらっしゃるのですか？」

紙コップをテーブルに戻しながらどちらにともなく聞いてみた。

「3年になります」

若々しいが静かで落ち着いた声である。

「3年！ 失礼ですがおいくつですか？」

「23です」

「出家をされたのは、そうすると」

「19のときです」

「十代ですか、ご両親がよく許してくれましたね」

「そうですね。大変でしたが、最後は解ってくれました」

「ご兄弟はいらっしゃるのですか？」

「いえ、一人っ子です」

「なんとも言いようが無いが、すごいご両親ですね」

「母は、毎年ここにやってきます」

「あなたが元気であるか、ご心配されているのでしょうか」

「この子は、ここに来てまだ3年ですが、ヒンズー語と英語とチベット語が話せるのです。若いからですかね。私など、38年になるのにチベット語はおろかヒンズー語さえもともに話せません」。と、初老の僧が優しい目で若い僧を見ながら口を開いた。

38年とは！また、これもすごいな。私は、内心びっくりしながら初老の僧を見つめた。このような異国の、しかも山の中での38年という長きに亘る修行の日々。どのように自分と対峙してきたのだろうか？そう思うと目の前の僧に何か透徹したものを感じた。今日の享楽に執着して生きる私には、とうてい理解することは無理と思い頭を切り替えた。

「実は、下に人を待たせています。安中さんといって、今回一緒にやってきた方なのですが、日蓮宗国柱会の理事長をされていた人です。ご住職も日蓮宗ですからご存知ありませんか」

「国柱会ですか。住職は確か、田中さんでしたよね。先輩、知っていますよね」と、若い僧が初老の僧に問いかけた。先輩？住職じゃあないのか。

「管長をなさっておられたお父さんとは面識ありませんが、息子さんは何年前にこちらに立ち寄られたことがありますので知っていると言えば知っていますが・・・」

なんとなく歯切れがよくない。あまり話したくない様子だ。ちょっと、気まずい雰囲気が漂う。

「1時間で下りてくる。と、安中さんに言ってきましたのでそろそろ失礼いたします。ありがとうございました」

「いえいえ、気をつけてよい旅を楽しんでください」と言う僧侶の声に送られて外へ出た。

「途中までご案内しましょう」といって先に立って歩く若い僧に謝意を表し、お布施として500ルピーを手渡す。

「それは、受け取れません。どうか、そのようなお気遣いはなさらないように…」と言うのを遮って、

「今日は、あなた方の修行の一端に触れさせていただきました。そればかりか、あなたを始め、ご住職や下働きの人たちに暖かいもてなしを受けました。これは、私の心からの

気持ちなのです。今は、これだけしか持ち合わせていないのが残念ですが皆さんの修行の一助としてお受け取りください」と言って500ルピーを手渡した。

若い僧は、困ったような顔を見せたが、手を合わせ、「南無妙法蓮華経」と唱えながら、「ありがとうございます」と言って受け取ってくれた。

コンクリートできれいに舗装された階段状の道のところまで案内された。

「こちらの道で、40分ぐらいで下まで行けます」

「分かりました。どうもありがとうございました」と、お礼を言い歩きかけた時、

「もう少し、お待ちになればロープウェイのリフトが動き始めます。それでしたら5分で下まで行きます。そちらがよいと思いますから」と言いながら、右手奥にあるロープウェイの駅らしき方に歩いて行き、むき出しの鉄骨にぶら下がるようにして引っ掛っている受話器をとってなにやら話をし始めた。

「動かしてくれるようです！」と、こちらに向かって声を出し、手招きをしている。

リフトは朝8時から動き始めるとのこと。今は、7時45分である。便宜を図ってくれたのだろう。ありがたいことだ。と、感謝しながらリフトに腰掛けた。遠くの山頂に白い建物が見えている。「ジャイナ教の寺院です」という青年僧の言葉に送られて下へ向かった。

「安中さん、すみません。遅くなってしまいました」

「いやいや、気にしないで大丈夫だよ。遅いので、心配はしていたんだが、安心したよ」

下で待っていた安中さんに日本山妙法寺でのことを報告すると、「いやあ、僕も行きかけたな。田中さんのことを知っていたのか！うん、あの息子は坊主としてはどうかと思うことがいろいろあったからなあ。同門としては、触れなくなかったんだと思うね」

安中さんは、ひとしきり田中さんのことを話していた。

「山ちゃん、昨日パトナからブダガヤへ向かったときナーランダーへ寄れないかなあ、って僕言ったでしょう。回り道になるからと言う理由で却下されたけどここから近いはずだよ。ナーランダーへ行ってくれるように運転手に言ってくれないかなあ」

ナーランダーは広大な仏教大学の遺跡があることで有名である。三蔵法師の名でよく知られている玄奘も6世紀中頃にこの大学で学んでいて、そのころには1万人を超える学僧が集っていたらしい。世界最大級の大学があった町か、よし、行こう。

「安中さん、1時間ぐらいで行けそうですよ」

「そうですね、そんなに離れてはいないはずなんだ、ここから」

ナーランダーに着いた、9時前である。途中で、軽い朝食をとったので真つすぐ来れば、40分ぐらいの道のりだ。

風化したようなレンガの土台、永い時の流れを感じさせる壁、仏塔らしき残骸、目の前に広がる古代仏教大学の遺跡は、その規模の広大さに驚かされる。居住型の学校で1万人の生徒と、1,500人の教員がいたという。こんなものが5世紀に建設されていたのか。

崩壊したレンガ造りの遺跡は、なにを語るのだろうか。

「安中さん、入りましょう」

「山ちゃん、変なのがいるよ。あれ、インド人だよ」  
「でかい声ですね。何を言ってるんでしょうかね」  
「日本語みたいだよ。あっ、こっちへ来るよ」  
「この土台は、5世紀！、あれは7世紀！。こっちよ、こっち。そこだめ、見えないよ。イスラムが壊したね。また、造った。12世紀、また、イスラム壊した」  
頼みもしないのに遺跡の説明を始めたインド人。私達の案内をするつもりのようだ。  
「山ちゃん、ルピー持ってる？」  
「勝手にやってんだから、いいんじゃないですか」  
「そうはいかないよ、後で付き纏われたら嫌じゃない」  
ズボンのポケットに250ほど入っているはずであった。  
「持ってますよ」  
「そう、なら安心だ。僕は大きいのしか持っていないから」  
「1000ルピー？」  
「うん、1000ルピー紙幣が7枚かな」  
「こっち、こっち、ここは教室、あれ、教壇。先生あそこに立つよ。生徒いっぱいいた。玄奘さんもいた。ここは一人部屋、あそこは二人部屋・・・」  
大きい声である。でも、説明は要領を得ていてわかりやすい。  
この遺跡には、11の僧院と14の寺院が残っている。5世紀に建設され、12世紀にイスラム教徒によって破壊されるまで世界最大の仏教大学であった。最盛期には、学僧1万人を超え、学生寮もあったとのこと。1500年前のことだ。日本では、古墳時代の終わるころか。インドの奥深い歴史を感じながら説明されるまま、遺跡を巡った。  
「たった、200ルピー！」。いやに低い押し殺したような声だ。  
100kgを優に超える巨漢である。大きいギョロ目が見下ろしてくる。案内してくれたお礼に手渡した200ルピー、これでも多すぎる。冗談じゃない！  
「安中さん、気にすることないですよ。行きましょう」  
巨漢の脇をすり抜けるように外へ出た。  
「たった200？一人200ね、二人だよ」  
デブちよのくせに足が速い。安中さんの行く手を塞ぐように前に立つ。  
たかり慣れているな、このやろう。  
結局、安中さんの持っていた1000ルピーを取られてしまった。無駄だとは思ったがお釣りをよこせと試してみた。意味不明の言葉でなにやら言ってニコニコしながら遺跡の中に去って行く。遠ざかっていく背中がいやに誇らしそうに見える。  
「山ちゃん、もういいよ。お布施と思えばいいじゃない」  
「安中さんがそう言うのなら、それでもいいけど、腹の虫がおさまりませんよ」  
「それもそうだろうけどさ、修行だよ、修行」  
「あっ！」

「どうしたの、山ちゃん」

「先に渡した200ルピー。しまった！あれも取られてしまった」

安中さんに慰められている。逆だよ、これは。という思いを抱いたままナーランダーを後にした。

ブッダガヤへ向かう車の中、無然としている私に気を利かせたわけでもないのだろうが、運転手が話しかけてきた。

「少し遠回りになるが釈迦の遺跡がある」と言う。

安中さんに伝えると、

「ヴァイシャーリーかな、たぶんそうでしょう」

「行ってみますか？そのヴァイ…何とかというところへ」

「そうだね、僕も行ったことないから見てみましょう」

1時間ちょっと走って鳥居のような門が見えてきた。そこをくぐって少し行くと農園風景が右手に広がってきた。椰子の木と灌木が数百メートル続いているだけの農園で、赤茶けた硬そうな土と乾燥した黄灰色の土ぼこりの広がる中では、広大な荒野にわずかに茂る草むらにしか見えない。安中さんの話では、お釈迦様が説法の旅の途中でこの地に立ち寄り、ここで遊女をしていたという女性から親切を受け、この遊女の招請に応じて彼女のマンゴー林にしばらく滞在し、戒律や生天の教え、四諦を説いた。という謂れのある場所らしい。小高い岩山があり、その中腹にお釈迦様が滞在した祠があるとのこと。

車を降りて歩き始める。暑い、今回の旅で始めて感じたインドの暑さだ。すぐに汗が流れてきた。帽子を持ってきてないな…。愚痴っても仕方ない、登ろう。

岩山を削って作ったような道が蛇行して上に伸びている。陽炎が立ち、赤茶色の大蛇がうねっているように見える。道の右側に、老人、老婆、10歳ぐらいまでと思われる子供たちが座り込んでいる。店を開いているのだろうか、線香や木彫りの造形物、石ころや干菓子などが地べたに置かれている。物乞いもいる。

下から怒鳴り声「\*+☆！#”！#★！」

振り向くと、カーキ色の制服を着た警官らしい男が、こん棒を右のほうに振りながら上って来る。一瞬、身を硬くしたが物乞いや押し売りを追い払うためとわかってホッとす。道の右側に身を寄せ合うようにして座っている人たちは、一様に痩せていて身なりも粗末で弱々しく見える。こん棒を持った警官だけが頑健そうである。どうやら、道の真ん中を越えてはいけならしい。観光客に迷惑をかけさせないための決まりなのかも知れない。背中を流れる汗を感じながら目的の場所に立った。30分ちょっとの登りだった。

ちょっと大き目の踊り場のような所だ。上がってすぐ左に石造りの祠、右奥に4、5段の石段があり、その上に社が建っている。石段の上り口の左手には山肌をくり貫いたような洞窟がある。多くの参拝客が熱心に祈りをささげていた。釈迦はここで教えを説きながら自らも修行を続けたのだという。(スジャータと乳粥供養、仏陀が覚りを得る前に苦行をした前正覚山について調べる。ここは、ヴァイシャーリーではなさそうだ)

お釈迦様の生き方に影響されたわけでもないのだが、山道を引き返しながらナーランダ一でのインド人のことを考えてみた。私も彼も、所詮、同じ人間、同じ命、どれだけの差があるというのか。生きている環境が違っているだけではないのか。立場が違えば私が彼なのだ。私たちは、それぞれに日々頑張っている。あれも、生きるための術なのだ。そう思い至ると、安中さんにしなくてもよい気遣いをさせたことが恥ずかしかった。

ブッダガヤのホテルに着いた時は、午後4時を少し回っていた。

「安中さん、疲れたでしょう、朝、早かったし。部屋で少し休んでください」

「うん、そうしたいんだけど、ちょっとそこらでお土産を買いたいから、それが終わってからにするよ」と言って出かける安中さんと7時にロビーで落ち合うことにして、私も町中へ散策に出かけた。

夕食は、ホテルに付随している食堂で摂ることにした。ビールを注文すると、置いてないという。

「ビールのみたい、山ちゃん」

「水で我慢してください」

「いや、やっぱりビールだよ、ここは」

「敬虔な仏教徒の宿泊するホテルだからアルコールは置いてないですよ、ここは」

「揚げ足とらないでよ」

「えっ？」

なんて掛け合いをしていたら、ロビーのフロントにいた男性が、ビールを2本持ってきた。外の酒屋で買って来たという。日本語はしゃべらないが、言ってることは解るらしい。

「そら、あったじゃない」

「うん、ありましたね。飲みましょう」

私たちは、さらにビールを3本追加したばかりかワインを2回に分けて買いに行ってもらった。

「赤を飲もう！」

「次は白だ！」

部屋に戻った時は11時を大きく過ぎていた。荷物をまとめてから倒れこむようにベッドに潜り込む。明日は、7時起きだ。

「山ちゃん、時間だよ」。ドアをたたく音で目が覚めた。7時を少し回っている。

今朝はモーニングコール無かったのかな？

「すみません、すぐ下に降りていきます」と返事をして、着替えをする前に先ず、トイレに入る。今日は、ベナレスだ。車で4、5時間はかかるというがもっとかも知れない。途中でトイレには行きたくない。便器に腰掛けながら、“年よりは朝が早いなあ……”という思いが頭をよぎる。

ロビーに降りた。7時半だ。安中さんがソファに座っておいしそうにコーヒーを飲んでいる。……この風景は、昨日と同じだ。

「お待たせしました、行きましょう」と、ことさら元気な声を出す。

「大丈夫だよ、1杯コーヒーを飲んでも。そこに座って飲みなさいよ」と、安中さんが苦笑いをしながら、言ってくれた。格別おいしく感じるコーヒーであった。

ブッダガヤよ、さようなら！また、来ることがあるかなあ、という思いを残しベナレスへ向けて出発した。

ベナレスまではハイウェイが通っていて私達の乗った車は100km近いスピードで走っていく。路上をうろつく牛やヤギをさして気にすることもなく走っていくドライバーには驚嘆した。

ベナレスの町には、昼前に着いた。途中でドライブインに寄り朝食をとったりしたのだがハイウェイが思いの外すいていて快適なドライブであった。

現世での欲望を巡礼の旅の中ですべて捨て、生まれ変わる来世での幸福を希求するヒンズー教徒の街、ベナレス。とうとうやってきた！

橋が見えている。ガンジス川に架かる橋だ。

「ガンジス川は、ヒンズー教徒にとって母であり、自分たちは母から生まれ、母に帰っていくが、命は永遠であり再び母から命を与えられる。ここに暮らす人たちは皆そう信じています」

運転手の淡々とした説明が、自然に受け入れられる。

あの向こうに例の場所がある！

長い橋である。1km以上はあるだろう。対岸が見えてきた。

あれが、ガートか！

ガートは、橋の袂付近からはるか川上に向かって延々と連なっていて、その先端は陽光を帯びた霞の中に溶け込んでしまっている。

ガート！ガンジス川に下りていく石段を備えた死を待つ人の暮らす家！死者には火葬場にもなる家だ。ここで死を迎えたヒンズー教徒は、ガンジス川の水に浸されてから茶毘に付される、と言う。そして、その遺灰はガンジス川に流されるのだ。

「ガートで暮らす人は、大抵は身寄りのない老人です。お金のない人もいます」

運転手の話が続けている。私は、気にかかっていたことを質問した。

「お金のない人は、そのまま川に流されると聞くが、本当ですか？」

「そうです。焼く薪は、買わなければなりません。薪を買うことのできない死人や赤ん坊、それからお腹に赤ちゃんを身籠っている女性は、そのまま流します」

「妊婦を流すのですか！」

思わず声をあげた。

「ええ、その他にも焼かずに流すことがあります」

車が、橋を渡った。直ぐに左側に出て、Uターンをして川岸へ下りていく。道は大勢の人でごった返している。かき分けるように進み、駐車するスペースを探すが見つからない。

「ここで、降りて下さい。車を停めてきます」

路上に立って、運転手を待つことになった。

「ここで待っていようよ、山ちゃん」

そこらを歩いてみようと思ひ、川岸のほうへ向かいかけた私に安中さんが言った。

「安中さん、歩きましょう。ここで立っていると、鬱陶しいことになりそうですよ」

私達の周りは、すでに3、4人の子供たちと物売りらしい老人たちに取り巻かれていた。

安中さんの不安そうな気持ちが伝わってくる。

「この人ばかりだよ、はぐれたら困るよ。居ようよ、ここに」

「ㄐ # \* \* + ☆ ! # "」、「\* + ☆ ! # "」、「ㄐ # \* \* + ☆ ! # "」、「\* + ☆ ! # "」

…… ? ? ? …………… ! ! ! ! ! ? ? ……

子供たちの手には、怪しげな細工物が握られている。これを買ってくれと言っているのだろう。「お金をくれ」と言っている子供もいるようだ。老人たちは、小さい器を持っている。何かの葉っぱで出来ていて、中にオレンジ色の花が敷き詰められている。その中に小さなロウソクがのっかっている。やはり、買ってくれと言っているのだろう。4～5cmの小魚が数匹入った缶を持っている人達もいた。

持て余し気味になっていたところに運転手がやってきた。運転手に促され、ガートの階段を下りガンジス川の岸边に立った。水辺からガートの階段までは10mほどの砂地になっている。階段が、ガンジス川の水中に続いているガートもある。川の水は、思っていたほどは汚れていない。ガンジス川の沐浴を見たのは、これで4度目である。リシュケシュで見た沐浴は、澄んだ水の中で行なわれていた。川底に沈んだ硬貨が、橋の上から見えていた。ハリドワールの水もきれいであった。コルカタは、水とは思いたくないほどの汚水であった。ここベナレスの水は、コルカタに近い色をしている。

水辺に、流木を利用した棚のような物置がいくつも建っている。縁台のようなものもある。沐浴する人達は、ここで着替えて水に入っていくのだろう。男は腰に一枚の布を巻いただけで、女はサリーを着用したまま沐浴をしている。家族連れだろうか、祖父母らしいカップルを若い夫婦が手伝っている。その周りを7歳ぐらいの女の子と4～5歳ぐらいの男の子が二人、纏わりつくように走り回っている。

今日は12月25日でキリスト教徒にとっては、記念すべき日だ。そういう訳でもないのだろうが、ガートから立ち上る煙が見えない。沐浴している人達も少ない。微風が流れ、川面は、柔らかな日の光を反射している。なんとも穏やかな光景だ。

「ボートに乗りますか？」と、運転手が聞いてきた。

「ええ、お願いします」と、思わず返事をしていた。

安中さんと私、それに運転手、3人でボートに乗り込んだ。客は、私と安中さんの二人だろう。ボートは、長さ7m弱でかんどり船とよく似ている。櫓の支点のところには外機エンジンが取り付けられている。船のクルーは二人で、舳先に棹を手にした男の子が立っていて、艫にエンジンを扱う初老の男性がいる。ボートが押し出される。なぜか、ボートを押していた人達が一緒に乗り込んできた。4人である。エンジンがかかり、ガートを右に

見ながら上流へ向かって進んでいく。ガートは、延々と連なっている。

「安中さん、いくつぐらいあるのですかね？」

「うん、多いね」

運転手に尋ねると、70軒近くあると言う。

15分ほど進んだところでボートは左へ舵を切り、少し沖に出てから流れに任せて川を下り始めた。対岸で2筋の煙が立ち上っている。実にのどかだ。

「山ちゃん、この人達、なんなの？」という声に、振り向くと、安中さんはボートを押していた人達に囲まれていた。声をかけると、そのうちの二人が私の方にやって来た。

一人が、手に持っている籠から葉っぱの器を取り出し、目の前に置いた。オレンジ色の花が敷き詰められて、ローソクが乗っかっている。もう一人が、バケツに入っている小魚を小さい缶に掬い、葉っぱの器に並べるように置いた。顔を上げて運転手を見ると、仕方ない、というような素振りを見せている。

「安中さん、これは灯籠流しと放生をしろ、と言ってるんじゃないでしょうかね」

「灯籠流しと放生か、この川に流された人達への供養という訳か」

「そうだと思います」

安中さんと私は、ローソクに火を灯した葉っぱの器を浮かべるようにして川面に流し、数匹入った小魚を缶から川の水の中に放した。

「山ちゃん、こいつら変だよ！また、やれって言ってるよ」

私にも、もう一度やるようにせっついている。

「安中さん、これは新手の押し売りだ！相手にしないようにしましょう」

結局、私たちは3度同じことをやる羽目になってしまった。狭い船の中では逃げようがなかった。

「安中さん、3回で済んでよかったと思きましょうよ」

「そうだね、インドだものね。もう、慣れたよ。気にしても仕方ないね」

船から下り、岸辺の砂を小瓶に詰め記念とする。日本に持ち帰り、永代供養をするつもりである。

渡ってきた橋の帰途、対岸に近づいたところで車が進まなくなった。ピタッ、と停まったとき全く動かない。

「ジャムですね、しばらくは動きません」と、運転手が説明する。

“ジャム”というのは交差点でのぐちゃぐちゃの渋滞のことを言うのだそうだ。

ジャムが起きると、2時間や3時間待つのは当たり前らしい。

「山ちゃん、あれ見てよ！」

安中さんが指し示す方に目をやると、反対車線をゆっくりと進んでいる車両の上に黄色い花に飾られた白い布が見えた。

「あれ、死体じゃあない？」

何かが白い布に包まれていた。隠れていた記憶が呼び覚まされる。

1999年1月、成田、関空、ムンバイ経由でバンガロールを訪れた時、この町に2週間滞在した。宿泊している家の直ぐ裏に、空軍の飛行場につながる広大な原野があった。オートバイを借りて、この原野を思いっきり走ったことが思い出される。この原野の一角に墓地があった。ある日、オートバイで原野を走り回って帰ってきたとき、この墓地の近くに一台のバンが停まっていた。バンの屋根の上にはキャリアーが付いていて、その周りにはキンセン花のようなオレンジ色の花で飾られていた。その中に白い布でくるまれたものが載せられていた。翌朝、散歩に出た時、なんとなく気になっていたので墓地へ寄ってみた。切り出したままの御影石に囲まれて畳一枚ほどの大きさの盛土があった。盛土の上に、オレンジ色の花が置かれていた。金色や銀色、赤や青色のテープが細い竹のようなものに纏わり付いていた。お菓子や清涼飲料水のボトルなども置かれていた。

ここに、埋葬されたのか。インドでは、土葬が残っているのか？と、その時感じた奇妙な感触が蘇ってきた。

「死体ですね、たぶん」

「山ちゃん、あそこ見て！ほら、その向こうの車の上にも乗っかっているよ」

「安中さん、外へ出てみましょう。当分、動きそうにないですよ」

先ほどから、気になっていたことがあった。あの2筋の煙のことだ。ボートに乗ってこちら側を見たとき立ち上っていた煙だ。

車から降りて、デッキのように張り出しているところまで歩いていく。下を覗く。何もなただの河原が広がっている。高い！橋下までは、優に30メートルはあるだろう。ここからは、細かいところまでは判別できない。下の河原の水際近くでうっすらと煙が立ち昇っていた。丸太で組んだ台座のようなものが見える。その上で薪が燻っているのか時折黒っぽい煙が混じる。その脇に二台の車が停まっていた。一台は軽トラックのようで荷台に薪らしい木が載っている。白いバンが並ぶようにして止められていた。屋根の上に白い布が見えていた。

END